

## 特集論文

## 道徳科における「深い学び」を実現するカリキュラムデザイン

Curriculum Design for Moral Education in order to Promote Children's Deeper Understanding

中山 眞弘

NAKAYAMA Masahiro

(和歌山大学教育学研究科  
教職開発専攻)

宮橋 小百合

MIYAHASHI Sayuri

(和歌山大学教育学研究科  
教職開発専攻)

糸我 直人

ITOGA Naohito

(和歌山大学教育学部  
附属小学校 教諭)

受理日 令和2年1月31日

**抄録：**平成28年3月に学習指導要領が告示され、平成30年から小学校で全面实施されている「特別の教科 道徳（道徳科）」において、総合単元的な道徳学習を展開した事例をもとに、子どもの学びを深めるための道徳科の授業について検討した。本稿では、子供が身近な社会に対する問題意識をもち、よりよい生き方について考え、学べる授業にするためには、他の教科同様に授業において扱う道徳的価値が既習知識とつながり、構造化される授業づくりを目指すためのカリキュラムデザインについて考察する。

**キーワード：**「特別の教科 道徳」、道徳科、深い学び、総合単元的な道徳学習

## 1. はじめに

平成28年3月に学習指導要領が告示され、平成30年から小学校では「特別の教科 道徳（道徳科）」（以下、道徳科と表記）として全面实施されている。道徳科では、検定教科書が使用されたことと、評価が行われることがこれまでの「道徳の時間」とは異なる点の1つである。基本的には、学校でのすべての教育活動を通して道徳教育が行われ、その要が道徳科の時間であることには変わりがない（浅見、2018a）。

道徳科では、児童や学校の実態に応じて「2学年を見通した重点的な指導」や「一つの内容項目を複数の時間で扱う指導を取り入れるなどの工夫を行うものとする」という記述はあるが、「第2に示す各学年段階の内容項目について、相当する各学年において全て取り上げることとする。」と明示されており、基本的には学年で内容項目をすべて取り上げることが求められる。しかしそれまで「道徳の時間」で行われる授業で扱われる読み物教材は、必ず使わなければならないとされたものではなく、教師の裁量で自らの学級の児童や学級の課題に応じて選択され、時には提示の仕方を工夫して、活用されてきたという違いがある。道徳科の授業をこなすのに精一杯という教師には、教科書の順番通りに授業を行うだけで、児童や学校の実態には合わせられない可能性もある。

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の

浅見（2018b）は、「道徳科はその教材自体を学ぶものではない。」と述べ、「本時のねらいとする道徳的価値を手がかりとして道徳性を養うために、教材を活用しながらよりよい生き方を学んでいくものである。だからこそ今まで以上に、子供が身近な社会や社会的な問題等に目を向け、その問題意識をもって授業に臨むことが大切である。」（p.2）と指摘している。

教材を手掛かりに、子供が身近な社会に対する問題意識をもち、よりよい生き方について考え、学べる授業にするためには、他の教科同様に知識がつながり、構造化される授業づくりを目指す必要がある。例えば、田村（2019）は、知識を中心に「深い学び」になる授業の条件として、①宣言的な知識がつながるタイプ、②手続き的な知識がつながるタイプ、③知識が場面や状況とつながるタイプ、④知識が目的や価値、手応えとつながるタイプの4つを挙げている（p.12-15）

①は、「〇〇は〇〇である」とする宣言的な知識、すなわち抽象的な情報としての知識が、実際の活動から得た個別的具体的な知識が、抽象化されることで宣言的な知識とつながり、理解に至る場面が想定されている。②は、個別の手続きについての知識が、振り返りや熟考によって構造化されることで連続的に理解され、やがては技能として身体化される場面が想定されている。③は、各教科や活動の中で獲得される多くの個別的で事実的な知識が、新たな場面や異なる状況でも適用され、汎用的な知識となっていく場面が想定さ

れている。田村（2019）によれば、①や②は「知識・技能」、③が「思考力・判断力・表現力等」に結び付くという（p.14）。そして、④について、「『学びに向かう力、人間性等』は、知識が目的や価値、手応えとつながることと考えていくべきではないか」と述べ、「目的や価値とつながったり、手応えとつながったりして構造化して高度化した状態になった知識こそが『学びを人生や社会に生かす』ものになると考えることができる」と説明している（田村、2019、p.15）。

道徳科においても、宣言的な知識である内容項目を、子供の日常や実際の活動から得られた個別具体的な知識とつながることを意識し、理解された道徳的価値をもとに、新たな場面や異なる状況でも判断や行動ができる道徳性が身体化されるような、「深い学び」が求められていると考えられる。

本稿では、そのような「深い学び」を実現するために、カリキュラムデザインを活かした道徳教育の実践をもとに、どのように子供たちの知識がつながり、最終的に「学びに向かう力・人間性等」の育成につながったのかについて考察する。

## 2. 「総合単元的な道徳学習」について

道徳科において、カリキュラムデザインを活かした授業設計と言えば「総合単元的な道徳学習」が代表的な取組だと言えよう。総合単元的な道徳学習の取組については、例えば、平成16・17年度に和歌山県のH小学校が文部科学省の指定を受け、研究を進めてきた。下記の図1が当時の研究推進図である。

H小学校が位置する地域では、防災意識を高めることに課題を置き、防災教育について重点的に取り組んでいた。H小学校もそのテーマに沿って学校カリキュラムはもちろん、学校行事についても地域行事と連携しながら取り組んできた歴史がある。しかし、このままでは、行事をこなすだけになり、意識高揚までに

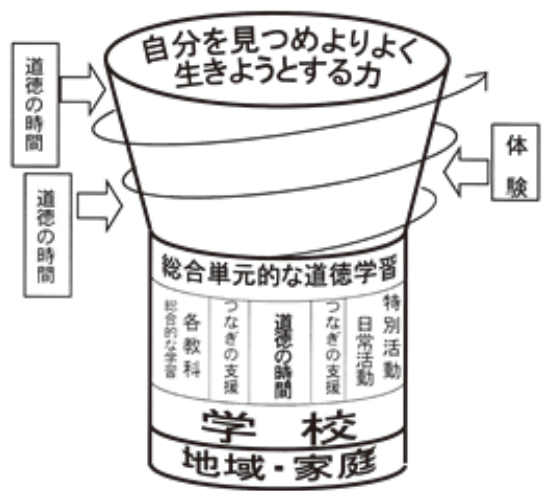


図1 H小学校の研究イメージ図

つなげていくことは難しいと考えられたことから、この防災教育と道徳を単元化し取り組みを進めることとなった。このときに、総合単元的な道徳学習の考え方は、H小学校が求めるものと一致し、図1のように総合的な学習などのカリキュラムや地域・家庭と連携を深め、心情的により防災意識について高めることができることを目的とし取組を始めた。このH小学校の実践は、道徳授業を要とし、防災教育の取組を補充・深化・統合する役割を十分に果たすことができた。

このように、これまでも道徳教育で深い学びを進めるための努力は様々な視点で行われてきている。そんな中、道徳が道徳科となり、より一層その気運が高まり、多面的・多角的に物事を考えていくための工夫が求められてきているのである。教科指導においては、従来から単元を見通した指導が図られており、単元目標に向かって毎時の授業が進められていくことにより、子供につけたい力を構築してきた。一方、道徳の時間は1時間で完結することが多く、目指す子供像にするためには不十分な場合が生じてきたのである。このたび、道徳科となり改めて道徳の単元構想の有効化が見なおされてきている。道徳を単元化して学習することは、他教科同様「課題探究型協同思考学習」（田沼、2017）であり、深い学びや「考え、議論する」道徳へとつなげていくことができると言えるのである。そこで、改めて「総合単元的な道徳学習」に目を向け、日常生活や様々な学習活動とつながる道徳科の在り方について研究を進めた。

## 3. 和歌山大学教育学部附属小学校における実践

### 3.1. 道徳科の研究方針

和歌山大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）では、研究主題を「未来に生きて働く資質・能力の育成」とし、研究副題を「探究力を育むカリキュラム・マネジメント」と設定している。そのため、全ての教科でカリキュラム・マネジメントによる探究力の向上を目指しており、道徳科においても例外ではない。そこで、道徳科では図2のような探究的な学びのイメージを設定している。この学びのイメージからもわかるように、この考え方の原理は「総合単元的な道徳学習」であり、附属小学校での実践も総合単元的な道徳学習の理論に則って行うこととした。

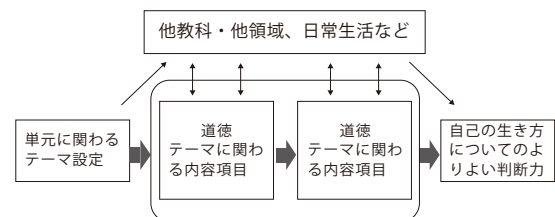


図2 探究的な学びのイメージ

### 3.2 糸我学級の実践

#### 3.2.1 学級の様子

第3著者の糸我教諭（以下、授業者と表記する）は、第3学年を担任しており、昨年度から道德部会の部員として実践を積み重ねてきている。今年度受け持った学級は、小学3年生という自然や生き物に強い関心を抱く発達年齢から、生き物に対する関心が高い子供が多く、休み時間も昆虫捕りに出かける姿がよく見られた。教室でも昆虫やメダカを飼育しており、その世話にかかる子供たちの様子を窺うことができた。（図3、図4）



図3 教室内の生き物飼育の様子

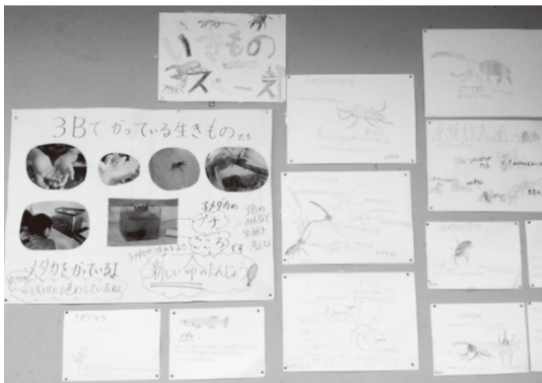


図4 教室の生き物についての掲示

しかしその反面、中にはきちんと世話ができない子供もおり、生き物を飼うという責任感や生命に対する大切さを充分理解できていない子供がいることも否定できない。このような子供の実態を踏まえ、この生き物に対する関心が高い今こそ「生命」の大切さを実感させる必要性を感じ、単元テーマを「命について考えよう」に設定して、単元構成を行うこととした。

#### 3.2.2 単元づくりについて

学級の実態を踏まえ「命について考えよう」というテーマで単元構成を行うにあたり、命を実感できる活動をどのように取り入れていくのかが重要になってくる。小学校学習指導要領解説 特別の教科道德編 第4章「指導計画作成上の配慮事項」にも「自然体験活動等の道德性を養うための体験活動と道德科の指導の時期や内容との関連を考慮」とある。テーマを実感で

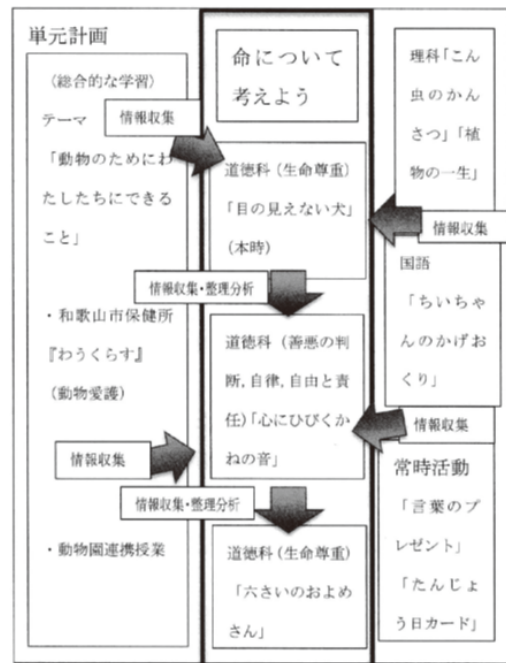


図5 単元の構成

きる体験活動を計画的に取り入れることが道德的価値に迫るキーポイントとなると言えよう。授業者は、体験的活動をキーにして、今回の道德的テーマ「命について考えよう」の単元を構成している。（図5）

#### 3.2.3 総合的な学習の時間とのつながり

授業者は、和歌山市保健所主催の「わうくらす (Wakayama Animal Welfare CLASS の略)」を活用することにした。「わうくらす」とは、市内に通学する小学生を対象に、動物をとおして命の大切さや他者とのかわりを学ぶことによって、こどもたちの豊かな心を育むことを目的に実施している動物愛護啓発事業である<sup>1)</sup>。全4回で実施し、第1回目と第4回目は犬を連れてきてくれたため、実際に犬とも触れ合う機会があった。

第1回目では、職員の方から犬の能力や習性、犬の気持ち、犬との接し方等についてお話を聞き、実際にボランティアさんが連れてきた犬に触れる体験を行った。

第2回目では、保健所の方から、生き物を飼う際の飼い主の責任についてお話をうかがった。飼い主はペットの命をあずかっていること、その生き物の幸せは飼い主にかかっていること等について学ぶ機会となった。

第3回目では、野良犬や捨て犬が殺処分されることがあるという現状について、保健所の方のお話を聞く機会となった。子供にとってもショックな内容であり、授業後には、「犬の命は人の命と同じだから捨てられる犬を無くしたい」、「もし自分が犬だったらとてもいやです」という感想が出た。



第4回目では、実際に聴診器を使って犬の心臓の心拍の音を聞き取ったり、自分たちの心臓の音を聞いて比較したりする体験を行った。

また、環境学習アドバイザーの松本氏による動物園連携授業も実施した。この取り組みでは、まず「お世話になっている動物探し」という活動を行った。自分がどんな動物とどのようなつながりがあるのかについて子供が考える時間となった。「たべもの」「のみもの」「しごと」「ペット」「小物・ふく」「くすり、けしょう品」「おながく」「スポーツ」「のうぎょう」「その他」のカテゴリーで、それぞれどのような動物が生活に関わっているのかについて学習した。この時、「おながく」のカテゴリーに、「馬頭琴」という2年生の国語の時間に学習した内容と関わる意見が出され、子供の中でこの学習が教科を超えてつながっていることがわかった。この学習の感想には、「動物の命を食べているので、とても動物に感謝して食べないといけないと思います」や「給食やお弁当を残さず、食べたいです」という意見が見られた。

さらに、次時には小学校の近隣にある和歌山城公園動物園を訪問し、動物の気持ちになって動物のしぐさや特徴を観察した。

### 3.2.4. 他教科とのつながり

理科の授業では、「こん虫のかんさつ」「植物の一生」という単元で、動物や植物についての生物学的な知識を扱っている。元々、教室内でも昆虫や動物を飼育している学級であり、理科の授業でも実際に観察させる時間を取り、昆虫や植物が生きているという実感を伴った知識として理解できるよう意識した指導が行われた。

また、国語科の「ちいちゃんのかげおくり」の単元では、戦時中の少女の悲しいお話としてではなく、読解していく中で「命の尊さ」や「命が失われることの悲しさ」を感じられるように指導した。この単元での学習は、道徳科の「生命尊重」の教材「六さいのおよめさん」の学習につながる題材として位置づけている。

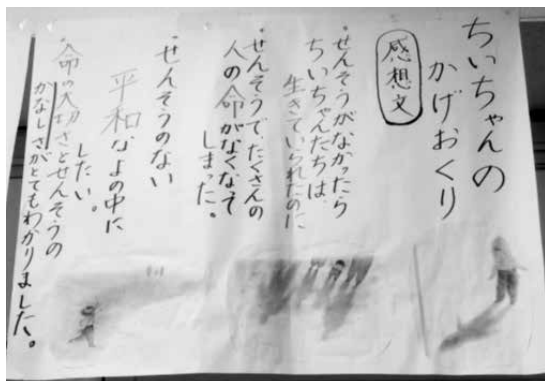


図6 国語科「ちいちゃんのかげおくり」の学習成果を示す教室掲示

### 3.2.5. 特別活動とのつながり

学級活動として、「言葉のプレゼント」「たんじょう日カード」の取り組みを行った。「たんじょう日カード」は、誕生日を迎える子供にみんながメッセージ（お手紙）を書き、1冊にまとめて手渡し取り組みである。誕生日を祝う意味を考え、命を授かっていることへの感謝の気持ち、命ある自己を大切にする気持ち、命ある友達の良さを見つけ認め合う気持ちを持ってほしいという意図で行っている。この取り組みをするとき授業者は、誕生日の意味を確認するようにしていた。

この取り組みで子供たちは、メッセージの内容に、友達のいいところを書くことが多かった。子供たちは、渡すときの相手を想像しながら楽しそうにカードを用意し、誕生日の子も照れながらも嬉しそうにカードを受け取っている姿が印象的だった。子供からは生まれてきての感謝や成長の喜びなどについての発言も見られた。

また、「言葉のプレゼント」は朝の会で、係の子がくじで一人を指名し、その子に対してみんなから一言いいところなどを伝える取り組みである。菊池省三氏の「ほめ言葉のシャワー」をイメージした取り組みで、昨年度も子供たちは同様の取組を行ってきた。今年度もやりたいと子供の中から意見が出て、実施することになった。子供の中には「～してくれてありがとう」などの意見も多かった。

さらに、命についての学習を深めるために、関連図書のコーナーを学級内に設置した。動物愛護に関する絵本や生命に関する絵本を読み聞かせる時間をつくり、日常的に命について考えられるように意識した。教室に図書コーナーがあることで、いつでも命に関する絵本が目につき、手に取りやすい環境をつくり、図書を通じて子供の思考が広げられるようにした。



図7 教室の一角の図書コーナー

このように単元構成することは、道徳的価値を探究的に深めていくことにつながっている。そして、総合的な学習の時間として「わうくらす」の体験や和歌山城公園動物園の飼育員の人から話を聞いたり、また教科との連携として理科や国語科とつながりを深めたり、日常活動においても「生命」を意識した取組を行っ

たりするなど、「生命」について子供たちが多面的・多角的に捉える機会を得ることができると考えた。この単元構成を作ることが、いかに子供たちが道徳的価値を深めることにつながっているのか、次に道徳科の授業実践の中から確認することとする。

### 3.3. 道徳科の授業実践

ここでは、図5で示された単元構想図の中で、一番初めの道徳授業として位置づけたのは、教材名「目の見えない犬」(学研教育みらい)である。すでに、この授業に入る前に「わうくらす」の体験や和歌山城公園動物園の飼育員からの話は体験済みである。

「目の見えない犬」は、内容項目「D 生命の尊さ」で、あらすじとしては、主人公が目の見えない捨て犬を拾い、団地で飼うことができないか自治会長の坂本さんに相談したが、住人の反対で飼うことができなかった。しかし、子供たちの懸命に世話をする姿を見た坂本さんがもう一度住民にお願いをして最後は飼うことができるようになったという話である。

この話は、事前に活動した「わうくらす」の体験とつながる面がある。「わうくらす」での学びがこの道徳授業の心情を育んでいくためにつながることを想定して授業が構成された。このときの指導略案が【資料1】である。

この授業を通して、児童の発言を振り返ってみると、このまま目の見えない犬が飼われなかったら「殺処分」されるという発言が度々されていた。この発言は、「わうくらす」の体験や職員からの講義から子供の心に大きく残ったからと言えるだろう。また、子供の発言の中には犬の幸せを考える発言もあった。このように具体的に捨て犬の処遇が想像できたのは、事前学習での「わうくらす」の影響であろう。

ただ、このままでは内容項目が「D 自然愛護」で終わってしまう恐れもある。今回の内容項目は生命尊重であるので、「人の命」につなげていく必要がある。今回、事前にわうくらすや動物園との交流で動物との関わりを深めてきたが、もう一つ「命」に関する絵本の読み聞かせも継続的に進められてきた。そのことが、本時の最後の発問「自分の命はどんな人たちに支えられているのでしょうか」の場面で、児童の一人が絵本を手に取り、絵本の出来事を紹介して命が周りの人たちに支えられていることを説明していた。このように、道徳において単元構成を図ることは、子供たちに教材だけの世界で終わらせるのではなく、自分たちの日常生活を強く想起させ、教材と結びつけ心情をより深く育んでいくことができるのである。

授業後の子供の振り返りには、「自分の命は色々なひとに支えられていると思いました。お母さんやお父さん おじいちゃん おばあちゃん のうかさ ゴミしゅうしゅう車とかそうゆ(い) うしごとがないと

じぶんは生きられない。ほんとにかんしゃしないといけないと思います。」という記述や、「今日の授業で思ったことは、私の身近な人から知らない人まで、いろいろな人が私を支えてくれているんだと思ったことです。私は大人になっても食べ物や生活にひつような物でいろいろな人に支えられないと生きていけないから、動物にかんしゃするだけでなく、働いてお金をかせいで食べ物をくれる家族などにもかんしゃしていきたいです。」という記述が見られた。「のうかさ」や「食べ物」という記述からは、環境学習アドバイザーの松本氏による動物園連携授業での学びが生かされている可能性がある。また、「ゴミしゅうしゅう車」という記述は、これまでの社会科の授業での学びや子供自身の生活経験と結びつけて考えたために出てきたと考えられる。

ただ上述の振り返りのように、既習事項と生活とをむすびつけた記述をした子供は多くなかった。これまでの教科等や総合的な学習の時間等で学んだ知識と子供自身の体験や生活経験などを結び付けて、我がごととして思考を深められるような授業展開については、今後も改善を重ねていく必要があった。

## 4. 考察

今回の授業を行うに当たり、本時の授業が総合的な学習の時間や国語、理科との結びつきがあることをより一層意識して取り組むことができるように工夫された点として、教室掲示などの教室環境による効果が大きかった。(図3、4、6、7、8) 先ほどの絵本を紹介した児童も、教室の前に陳列された絵本(図7)を手に取り命の場面を紹介していたが、授業中、目の前に並べられた「命の絵本」は、児童の心情を多面的につながり合わせるのにとっても有効的な環境であったと言える。同様に教室の周りに「わうくらす」の体験記録や「和歌山城公園動物園」との活動記録を掲示することで、常にこれまでの活動が児童の心の基盤となり、本時の心情を深める場面の糧になったと言える。実際、児童の発言の中には掲示物を確認し、全国で殺処分された犬の数を使って行う場面も見られた。

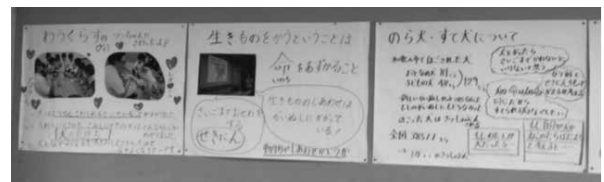


図8 「わうくらす」の学習成果を示す教室掲示

その上、教室環境を整え総合単元的に道徳を進めていくことは、単元学習を貫いている間は常に児童の心にこのテーマが根付けられていることがわかる。単元後半の教材「六さいのおよめさん」の授業を実践した

とき、教師が子供たちに向けて「今、何を学習していますか？」と問うと一斉に「命」という答えが返ってきた。これは、単元構想がしっかりと位置づけられていたとともに、教室環境が常に「命」を意識していた成果とも言える。授業中の発言の中にも随分前に学習した国語科の「ちいちゃんのかげおくり」を取り上げた発言もあった。教材文が同じ小さな女の子の「死」を取り上げたものであったので、戦争と病気という違いはあれども国語科とのつながりが意識された瞬間であった。これも教室に掲示されていた授業記録（図6）が少なからず効果があったためであろう。

このように、道徳科における単元構想は、他教科・領域や日常生活ともしっかりとつながりを持たせ、子供たちが多面的・多角的に考えを深め、教材の状況や場面をもとに自我関与させる効果が大きいと言える。

浅見（2018b）は、道徳科において「自己の生き方について考えを深めることは、各教科等で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して感じたことや考えたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりしていくことである。」と述べている。上述の実践では、まさに各教科で学んだことや体験したことを、道徳科での発問と結びつけて考察し、授業の最後には自らの生活に関連付けて振り返りができている。

田村（2019）のいう、①宣言的な知識である「命の大切さ」という知識が、総合的な学習の時間や理科、特別活動での学びを通して多面的・多角的な知識として構造化され、道徳科で扱った教材の内容である状況と結びつき（③知識が場面や状況とつながるタイプ）、④として示された、知識が価値とつながったと考えられる（p.12-15）。そのため、子供にとって命について考えを深める学習になったと言える。

## 5. おわりに

以上のように、総合単元的に道徳教育を進めていくことは、道徳的価値と他教科・領域や日常生活とのつ

ながりを強固にし、子供たちに多面的・多角的な考察を促し、価値について自我関与させるための有効な手法の一つである。

総合的な学習の時間や、理科や国語の各教科等で学習した内容をもとに、道徳科の授業でそれらの知識を統合し、構造化していくことで、知識が身体化されることは、道徳的態度を育成することにもつながるだろう。それは、今までの「道徳の時間」で批判された、「登場人物の心情的な読み取り」に偏らない指導であり、「自己の生き方について考えを深める」ための指導となるだろう。

もちろん、総合単元的に道徳教育を進めていくだけでなく、要となる道徳科の授業づくりについて、一つひとつの道徳授業の構成や展開もしっかりしていく必要がある。加えて道徳的価値を育むために授業を創意工夫していくことも大切で、総合単元的に道徳を進めていくことと合いますと相乗効果が期待できるだろう。

## 参考文献

- ・押谷由夫（1999）「新しい道徳教育の理念と方法」東洋館出版社
- ・田沼茂紀（2017）「考え、議論する道徳科授業の新しいアプローチ 10」『パッケージ型ユニットの理論』明治図書
- ・小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「特別の教科道徳編」
- ・浅見哲也（2018a）「道徳科を要とした道徳教育の展開」『初等教育資料』No.974、東洋館出版、23ページ
- ・浅見哲也（2018b）「『考え、議論する道徳』が目指す道徳科の授業の姿」『初等教育資料』No.974、東洋館出版、56-57ページ
- ・田村学（2019）「『深い学び』と知識の構造化」『国語教育』11月号、No.839、12-15ページ

## 注

- 1) 和歌山県による「わうくらす」の事業紹介サイト <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/031601/d00152747.html>（2019/12/11 確認）



## 【資料1】道徳科の指導略案

本時の目標：自分の命がたくさんの支えの中であることを知り、命あるもの全てのものを大切にしようとする心情を育てる。

## 本時の展開

学習活動と予想される子どもの反応	留意点・評価
<p>1. 総合的な学習で命について学んできた写真を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・犬も私たちと同じように心臓の音が聞こえた。</li> <li>・犬の心臓の音は速かった。</li> </ul> <p>○本時の学習課題を知る。</p> <div data-bbox="363 589 1197 640" style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 5px;">「命について考えよう」</div> <p>2. 「目の見えない犬」を読み、話し合う。</p> <p>○「わたし」に相談された坂本さんは、どんな思いだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子犬を助けたい</li> <li>・団地の人の反対があるので、悩んでいる。</li> </ul> <p>○「わたし」が団地の決まりを変えてまで、目の見えない犬を飼おうとしたのは、なぜでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・助けてあげないと子犬が死んでしまうから。</li> <li>・どんな生き物にも命があってその命は自分たちと同じように大切だから。</li> </ul> <div data-bbox="229 1055 836 1111" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">◎自分の命は、どんな人たちに支えられているのだろう</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族に支えられている。</li> <li>・友達に支えられている。</li> </ul> <p>○本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の命は、たくさんの人に支えられていることがわかりました。だから命をもっと大切にしないといけないと思いました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の教室掲示の写真を振り返る。</li> <li>・今までの学びとつなげられるようにする。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あらすじを確認する。</li> <li>・「わたし」の子犬を助けたいという気持ちに対する反対意見や問題点を明確にする。</li> <li>・困難な状況を理解させる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・より深く価値にせまるために、再度問い返す。</li> </ul> <p>「本当に団地の決まりを変えてもいいの？」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の命がどんな人達に支えられているのかをワークシートに図で表す。</li> </ul> <p><b>評</b> 自分の命が、たくさんの人に支えられていることに気づくことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「命について考えよう」のテーマに即して、これからの自分の生き方につなげて振り返りが書けるようにする。</li> </ul>